

びわこ文化公園植物だより〔β 版〕

サルスベリ ミソハギ科

学名 *Lagerstroemia indica*



サルスベリの花. 中央の緑の球形は花芽、左は昨年度の
開花跡で果実が弾けて種子を散布した後の状態。花は開
花しているが、雄しべの大半はまだ折りたたまれていて
充分に開いていない。開花直後の花の状態。

暑い毎日が続いていますが、日暮れの時間が早くな
り、影が長く伸びる頃には涼しさを感じる季節になり
ました。暑さは残るものの、秋を感じさせてくれる時期

です。厳しい暑さのせい、公園内の花も控えめな感じ
です。花の数も少なめですし、開花時間も短く、目に
する機会が減っています。そんな中、サルスベリのピン
クや白色の花は、公園内の所々に彩りを添えてくれ
ています。

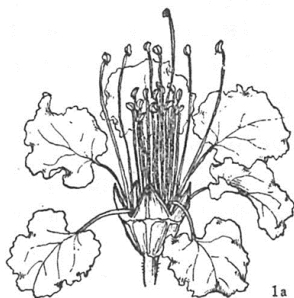


公園管理事務所前のサルスベリ

サルスベリは中国原産の落葉樹で、8月から9月にかけて長く花を咲かせる植物です。赤い花が長く咲くので、百日紅(ヒャクジツコウ)とも呼ばれています。同じ仲間に屋久島と種子島に分布するヤクシマサルスベリ、屋久島より南の島々に分布するシマサルスベリがあります。サルスベリが属するミソハギ科は主に熱帯地方に分布するグループで、サルスベリ属は東南アジアからマレーシア、オーストラリアに分布します。屋久島あたりが分布の北限といえると思いますが、じつは本州でも鮮新世と洪積世の地層から果実が出土しており、古い昔に絶滅した植物です。

枝先に円錐状の花の集まり(花序)を付け、紅紫色または白色の美しい花を開きます。うまく写真に撮れなかったので、保育社の「原色日本植物図鑑 木本編I」からシマサルスベリの図を拝借して説明してみます。花の根元付近の萼は6つに分かれ、その上に6枚の花びらが広がる。1枚の花びらは1~1.5cm程度の円形ですが、花びらの縁が不規則に縮れるのと花びらの基部に長い爪があるのが特徴です。長い爪というより、花びらを支える柄のような感じです。喩えていえば 6

枚の縁が縮れた団扇で囲まれているといった感じでしょうか。花の中央に雌しべが長く伸び、その周りを6本の少し長い雄しべが取り囲み、長い雄しべの内側に短い雄しべが見られます。異なる長さの雄しべを配置することで、花蜜を求めて訪れる昆虫たち(訪花昆虫)に効率的に花粉を付けて運んでもらうことが期待されています。果実は直径 7mm 程度の球形です。花が咲く前には果実は6裂して種子を散布します。



左:シマサルスベリの花の拡大図
(木村・村田(1979)より).

サルスベリの名前は樹皮がつるつるしているので、木登り上手なサルも滑るという意味です。樹木が太る際に樹皮層の中にコルク形成層が部分的に生じ、その部分からポロポロと剥がれ落ちます。剥がれ落ちた結果、樹皮は子鹿の肌状に斑になり、いわゆる鹿の子模様を示します。こうした樹皮は、サルスベリの他に、カゴノキやナツツバキ、リョウブ、プラタナス等に見られます。サルスベリの仲間の本来の自生地である熱帯地



サルスベリの樹皮. 縦に剥げて落下しやすい.

域では、自力で立ち上がって成長する植物の他に、他の植物に巻き付いたりよじ登ったりしながら成長するつる植物が見られます。単に幹を利用するだけなら問題は少ないかもしれませんが、幹をよじ登って葉の茂る樹冠層に達し、母樹の上につる植物が葉を広げて、母樹を覆い尽くし、母樹を枯らしてしまうことがあります。このようなつる植物が登りにくいように、幹をつるつるにししたり、樹皮を剥げやすくしてよじ登るつる植物ごと落としてしまったりすることは、植物の生き残り戦略として有効だと考えられています。

春の芽吹きが遅く、他の樹木が青々と茂った頃にやっと芽を出し、それでいて秋の落葉は早くて、早々に散ってしまう。いつ仕事しているのか分からないので「怠けの木」とも呼ばれますが、つる植物との競争には負けない準備を整えている。それがサルスベリです。サルスベリの紅い花が少なくなってきたら、もうすぐに秋です。

(龍谷大学先端理工学部環境生態工学課程
横田岳人)

(参考文献)

1) 北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑 木本編 I」
(保育社, 1979 年)

2) 岡村はた・橋本光久・室井綽「新訂・図解 植物観察
事典」(地人書館, 1993 年)

【関連 URL】

米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学
名インデックス」(YList), <http://ylist.info/> (2023
年 8 月 31 日).